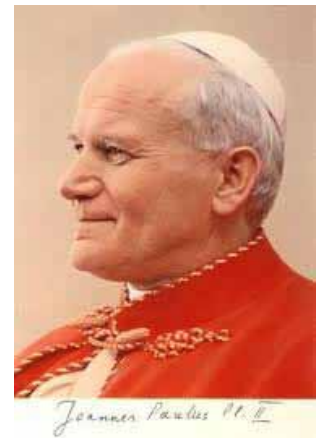


ローマ、2011年5月9日 (Zenit.org)

「それは1944年8月のことでした。ナチスの支配に対して反乱が勃発したので、サピエー枢機卿様が神学生を司教館に集めることを決意されたのです。そのとき私は初めてカロル・ヴォイティーワと出会ったのです」とカシミエルツ・スデーラ神父 (Suder: 1922年生まれ) は、机の上に立てかけられた白い紙に小さい字で書き込まれた記録を落ち着いた声で読んで行った。机の反対側には、クラコフにやってきた報道陣がちょうど試験を受ける学生のように座っている。彼らは、先の大戦の末期に、クラコフの最後の司教であり統治者であった不屈のアダム・サピエー八大司教によって組織された地下神学校で勉強した8人の若者の最後の生き残りの証言を取材するためこの町にやってきたのだ。



スデーラ神父は続ける。「ナチスの占領時代には、若者が枢機卿に司祭になりたという希望を伝えると、枢機卿様は隠れて自宅で勉強するように指示されていました。ですから、私たちは互いにまったく顔を知りませんでした」

それはやむを得ない措置であった。と言うのは、一度ナチスが神学校で夜を過ごしていた5人の若い神学生を見つけ、彼らを連行し、ある者を銃殺し、残りをアウシュビッツに送るという事件があったからだ。そのためサピエー八大司教は、神学生をできるだけ秘密裏に組織しようと決心したのである。

その老司祭の後ろには、考えにふけるカロル・ヴォイティーワの肖像画が掛けてある。手であごを支える姿を見ると、自身も70年前のあの恐ろしい日々 of 回想に参加しているかのようである。その小さな部屋の窓から見える景色の先には、町のど真ん中にあるマリアッカの大聖堂が見える。ヴォイティーワが50年代に司牧を担当していた教会である。

「あの8月に会ったカロルの姿は、今もはっきりと記憶に焼き付いています。分厚い生地 of ズボンの上に白いシャツを着て、足には木靴を履いていました。頭には打ち傷がありました。すぐにわかったのですが、トラックとぶつかったのです (石切場での仕事の帰りにナチス親衛隊のトラックにぶつけられて、意識を失ってその場に倒れていたが、誰かに助けられた。訳者注)」

「彼はよい仲間でした。人との付き合いにまったく問題を感じさせませんでした。このことはすぐにみんなの知るところとなりました。彼はあまり口数が多くはなく、むしろ人の話を聞く方を好んでいました。なにか問題があればそれについての自分の意見を表明しましたが、決してそれを他人に押しつけることはありませんでした。人を理解しようと努め、一度も嘘をついたことはありませんでした」

若きヴォイティーワは他の学生にノートを貸し (ノートのどの頁にも「イエズスとマリア」の頭文字が記されていました) 進んで学友の助けになろうとしましたが、試験においては別でした。ある学生が試験中に彼に答えを教えてくださいと頼んだのですが、彼はこう答えたのです。「少し心を集中して、聖霊に頼め。そうしてから、独りで問題を解け」と。

「穏やかな眼差しとユーモアのセンスをもっていました。冗談を聞くのが好きでした」とスデーラ神父は言う。神学校での規律にきっちり従い、授業中は集中し、すでに問題をまとめる能力があった。教授陣は彼にとっても満足していた。

「ワルシャワの蜂起が失敗に終わると、司教館には町から脱出しなければならない司祭たちがやってきました。そこで私たち神学生は個室を彼らのために引き渡し、枢機卿の謁見室と一緒に寝ることにな

りました。授業もその部屋でしていました」

この窮屈な生活は1945年1月のソビエト軍の到来まで続いたが、若者たちの関係を親密にした。「彼がワドビチェ生まれで、母親と兄弟の死後、父親と一緒にクラコフに移ってきたこと、1941年父親が亡くなった時には、自分の人生の目的は司祭になることだと考えていたことなどを知りました」

若きヴォイティーワの同級生が一生忘れなかった、もう一つの特徴は「人間の苦しみに対する感受性です。貧しい人を見ると、自分がもらっていたものをすべて与えていました。しかし、目立たない仕方で、よい業を見せびらかさないように心がけていました」

「なによりも、祈りができるという恵みを持っていました。ほとんどいつも跪いて、ロザリオを手にして、首にはカルメル会のスカプラリオをかけて祈っていました。神学の勉強と祈りを切り離すことはありませんでした。その二つは彼にとって一つのものでしたから。夜の祈りの後で、神学の教科書やノートをもってお御堂に残っていました。勉強が祈りに支えられていること、あるいはその逆のことが彼の特徴でした」

スデール神父はあの遠い昔に思いをはせ、フランシスカンスカ通りの礼拝堂を思い出した。その礼拝堂で、若い新学生たちはナチスに対する不屈の反対者でポーランドのレジスタンスの要であったサピエーハ枢機卿が、しばしば夜の静寂の中で両手を十字架のように広げて床にうつぶせになって祈っているのを見た。また今日では聖ペトロ教会の柱廊に飾ってある肖像画からほほえみを見せているかつての同級生に思いをはせ、謙遜にこう認めた。「私は彼ほどの専心した祈りをすることはできませんでした」

ヴォイティーワは1946年11月1日に司祭に叙階される。翌日ワウエルのカテドラルの聖レオナルドのお御堂で、11月10日にはワドビチェの教会で初ミサを挙げる。

「それと同じ週に、カルロはローマに向けて神学の博士課程の勉強のために出発しました。神学校での勉強はわずか二年間でした」

のちに母国と世界の歴史を変えることに貢献する人物の大冒険が始まったのだ。

(Chiara Santomiero)